

静岡県における検診について

溝口 功一（国立病院機構静岡医療センター脳神経内科）

研究要旨

静岡県在住スモン患者の現状と療養上の問題点を把握し、今後の患者指導、恒久対策、高齢化対策に生かしていくことを目的として、スモン検診を行った。今年度は、新型コロナウイルス感染症の蔓延下であるため、静岡県スモン友の会と相談の上、電話による検診となった。患者の都合の良い時間帯に合わせて、医師から電話し、臨床調査個人票に基づいて検診を行った。検診参加者は7名であった。検診を受診した90歳代の患者は転倒による大腿骨頸部骨折により、最終的に施設入所となった。一方、残りの6名では、全般的には大きな変化はなかったものの、1年間の転倒回数が増加していた。新型コロナウイルス感染症予防策の影響でサルコペニアの悪化などが推測された。また、将来に対する不安に関しても、自分自身の病状よりも介護者や家族への関心が高く、新型コロナウイルス感染症の影響が推測された。電話による検診では、診察はできないものの日常生活の状態については、概ね問題なく聴取できた。そのほか、療養に関しても相談したため、電話再診は約1時間程度かかった。スモン患者の高齢化に伴い検診に参加することが困難な患者が増加することが推定され、今後、電話による検診も考慮すべき方法の一つであると考えられた。

A. 研究目的

スモン検診を通して、静岡県在住スモン患者の現状と療養上の問題点を把握し、今後の患者指導、恒久対策、高齢化対策に生かしていくことを目的とする。また、電話検診の利点と欠点についても、考察を加える。

B. 研究方法

静岡県在住スモン患者について、あらかじめスモン友の会から提供いただいた非会員を含む検診参加希望者に対して、事前調整を行った。電話検診では、臨床個人調査票に基づき、聴取できる設問について質問し、患者本人から回答を得た。また、入院等で患者本人から聴取できない場合には、介護者から聴取することとした。なお、例年行っていた保健師やソーシャルワーカーによる面接、および、血液検査等は行わなかった。（倫理面への配慮）

スモン患者を対象として行うため、静岡医療センター倫理委員会に受審し、承認を得た。

C. 研究結果

スモン友の会発足時には会員数は112名であったが、令和2年6月時点での静岡県在住スモン患者は、スモン友の会会員が14名、非会員が3名、計17名である。今年度、友の会の調査によれば、検診参加予定者は8名であり、在宅訪問検診希望者はいなかった。しかし、予定者の1名が電話検診予定日の1週間前に死亡したため、電話検診が行えたのは7名で、男性は2名、女性5名、平均年齢は77.9歳であった。スモン友の会会員は5名、非会員は2名であった。年次ごとの検診者数（図1）は、平成9年30名をピークとして、平成20年ごろから徐々に減少し、平成30年以降は7～8名の状況である。また、平成30年以降、希望者がいないため、在宅検診は行えていない。

スモンの主な症状に関する検診結果についてを図2に示す。視力は、「大見出しが読める」3名、「細かい字も何とか読める～正常」4名であった。歩行は「要介助で車椅子」1名、「かなり不安定」1名、「やや不



図1 検診受診者数の推移

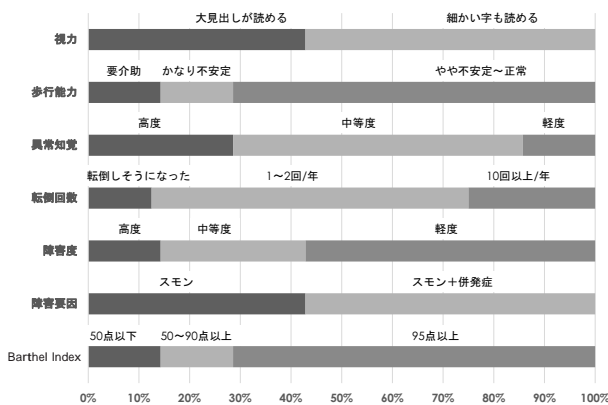


図2 主な身体所見と障害度

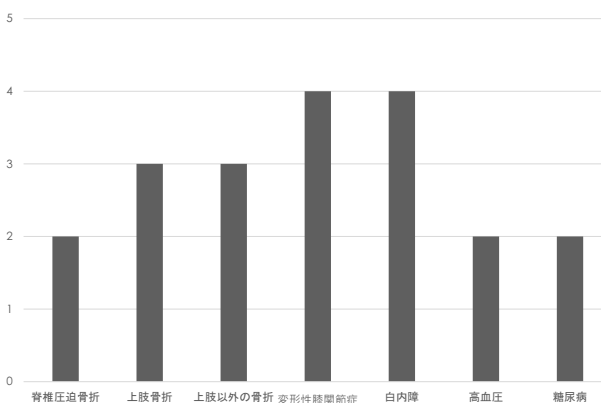


図3 併発症

安定」5名であった。異常知覚では、高度2名、中等度4名、軽度1名と全般に悪化していた。転倒については、「転倒しそうになった」1名以外は、「転倒1～9回/年」が4名、「転倒10回以上/年」2名であった。障害度は「高度」1名、「中等度」2名、「軽度」4名で、障害要因としては、「スモン+併発症」が4名、「スモン」単独は3名であった。Barthel Indexでは、

100点5名、90点1名、25点が1名であった。

併発症(図3)は骨関節系が最も多く、なかでも、7名全員が骨折の既往を持ち、脊椎圧迫骨折2名、上肢3名、大腿骨頸部骨折など上肢以外の骨折3名であった。また、膝関節症は4名に認められた。骨関節系以外の併発症は、白内障4名、高血圧2名、糖尿病2名であった。その他には、シェーグレン症候群・脂質代謝異常症・逆流性食道炎・甲状腺機能低下症などがそれぞれ1名であった。

介護保険の申請をしているのは2名で、要支援1が1名、要介護4が1名であった。介護度の評価については、2名とも「おおむね妥当」であった。医師意見書は、2名とも「日頃から診察してもらっている医師」に記載してもらっていた。利用しているサービスは、要支援2の1名は訪問介護(家事援助)のみで、要介護4の1名は大腿骨頸部骨折のため、入院中で、今後の生活場所を相談している状態であった。将来に対する不安については、6名が今後の介護等に対する不安を感じており、独居から5人暮らしまで家族構成とは無関係であり、昨年度の1名より増加していた。なお、「不安がない」1名は若年スモンで、夫と二人暮らしの患者であった。

電話検診を行うにあたり、事前に、それぞれの患者と電話可能な日と時間帯を相談した。当初、医師の連絡先を患者会から検診参加希望者に知らせ、都合の良い時間を医師に連絡してもらうようにしたつもりであったが、医師には連絡が入らなかったため、医師側から患者に連絡した結果、全員が19時頃からの開始を希望した。電話検診では、過去の臨床個人調査票を参考にしながら、項目に沿って、入院中の1名を除き患者本人から聴取した。調査終了後も、日頃不安に思うこと、入所先の相談、患者会の今後についての相談などがあり、1回にかかった時間は、概ね1時間程度であった。

D. 考察

静岡県スモン友の会は、発足当時の患者数は112名だが、存命中の患者は14名で、非会員を含めても、県内在住のスモン患者は17名である。今年度は新型コロナウイルス感染症が蔓延していることもあり、例

年行なっている対面による検診も患者会との話し合いの結果、電話による健診となった。また、以前から、在宅検診が少なかったため、患者会と相談をしていたが、同様な理由で、希望者はなかった。

検診参加者の状態については、聴取できる範囲では、1名を除き昨年度¹⁾と概ね変化がないと考えられた。しかし、今年度大きく変化した点は、転倒回数と将来への不安に関してである。

転倒に関しては人数、回数共に増加していた。2019年の検診では、「転倒なし」および「転倒しそうになった」が計3名で、「転倒1~2回/年」が4名であった。しかし、今年度は7名中6名が転倒していた。その中で、静岡県在住スモン患者で最高齢者が転倒による大腿骨頸部骨折をおこし、歩行不能となり、生活全般に介助が必要となった。息子さんとの二人暮らしであり、介護の必要状況から今後の生活場所を介護施設へと移ることとなった。その他の患者では骨折などをおこしてはいないものの、ふらつきによる転倒が増加していた。今後、同様な社会状況が持続することも考慮し、自宅内のできるリハビリテーションなどの積極的な普及が望まれる。

一方、将来への不安に関しては、昨年度の検診時¹⁾には、「不安なし」2名、「わからない」3名、「不安あり」2名という結果で、具体的には、「寝たきりになること」、「施設の費用」が合わせて3名、「介護者の高齢化」は1名であった。しかし、今年度は、「不安なし」1名、「不安あり」6名という結果であった。不安の内容については、「適当な介護者がいない」、「介護者の高齢化」、「家族全員が元気でいられるのか不安」という理由が挙げられ、患者自身の問題よりも、介護者や家族への心配や不安を訴えていた。

転倒と将来への不安に関しては、新型コロナウイルス感染性の影響が推測される。転倒に関しては、「ステイホーム」が予防策として上げられているため、日ごろ行っていた屋外での活動が制限され、運動量の低下がおこり、筋力低下などサルコペニアが進んだ可能性が示唆される。また、将来への不安に関しては、自宅内で過ごす時間が増え、家族への気遣いなどが増えた可能性も考えられた。

昨年度まで、集団検診を行っていたが、今年度、患

者会との相談の上、新型コロナウイルス感染症の影響により電話による検診となった。電話検診の時間設定を行うため、医師側から連絡したが、時間調整に時間を要した。また、臨床個人調査票を用いて、順序立てて質問していくため、患者一人当たり30分程度の時間を予定していた。しかし、実際には、日頃からの不安、患者会の今後について、あるいは、療養先などについてなどを相談した時間があり、一人当たり1時間程度の時間となった。対面での集団検診の場合、ある程度時間が限られることもあり、患者側からの質問や相談も限られており、十分な相談ができていなかったのかもしれない。今後、高齢化に伴い集団検診に参加できないことも想定されるため、在宅検診に加えて、電話による検診も一つの方法であると考えられた。ただ、検診の申し込みなどについては、郵送などの方法を工夫が必要であると考えられた。

E. 結論

静岡県在住スモン患者7名に対して、新型コロナウイルス感染症蔓延のため、電話による検診を行った。新型コロナウイルス感染症蔓延下の影響として、転倒が増加したこと、および、不安に思うことの2点が推定された。

G. 研究発表

1. 論文発表
なし
2. 学会発表
なし

I. 文献

- 1) 溝口功一, 杉浦明, 小尾智一 静岡県在住スモン患者の現状調査 厚生労働行政推進調査事業補助金(難治性疾患政策研究事業) スモンに関する調査研究 令和元年度総括・分担研究報告書, pp 108-110, 令和2年3月